

福井・福井城跡

屋敷から出土しているが、木簡22は西側の屋敷境となる水路跡から、木簡(5)(6)は南側の屋敷内の土坑から、木簡(12)(13)は築城期の屋敷内の水路跡から出土している。

- |   |  |
|---|--|
| 所在地   | 福井市宝永三丁目   |
| 調査期間  | 二〇〇〇年(平12)四月～二〇〇一年六月   |
| 発掘機関  | 福井市教育委員会   |
| 調査担当者   | 長谷川健一・田中伸卓   |
| 遺跡の種類   | 城郭跡  |
| 遺跡の年代   | 江戸時代   |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要                                 | 調査は本誌第二二号・二三二号で報告した調査地二の継続調査である。公共施設建設に伴う調査で、一九九七年に開始し、最終的には二〇〇二年六月に終了した |
| 調査地内の武家屋敷は幾度かの変遷が見られ、築城当初は一軒であったが後に南北二軒に分かれる。 | 場所は福井城跡の北端中央「舍人門」周辺にある。<br>調査面積は約七二〇〇m <sup>2</sup> 。                    |
| 木簡のほとんどが北側の                                   |  |

調査は本誌第一号・二号で報告した調査地の継続調査である。公共施設建設に伴う調査で、一九九七年に開始し、最終的には

二〇〇二年六月に終了した。

「舍人門」周辺にあたる。

調査面積は約七二一〇〇m<sup>2</sup>。

調査地内の武家屋敷は幾

度がの夢還が見られ築城

南北二軒に分かれる。

木簡のほとんどが北側の



(福 井)

(1)	木簡の积文・内容	60
(2)	「御手廻 川地源五右衛門」	$125 \times 30 \times 5$ 011
(3)	□□□□□	$(147) \times (30) \times 2$ 081
(4)	「□□□」	$103 \times 14 \times 2$ 051
(5)	□□□	$(224) \times 30 \times 1$ 081
(6)	「卷石不盈尺孤竹 不成林雅歲寒」	$264 \times 111 \times 7$ 065
等知	「兩人 拭風月妍 木斎」	$264 \times 96 \times 6$ 065

(7)

多木

打木錢

十一

(32)  $\times 132 \times 6$  065

S-三十六(水路)

〔12〕  
・御目待御祈念御札進上御太刀一腰御馬一疋」

天稿

87×110×31 065

S-九一(ゴミ穴)

(8)

卷之三

(9)

卷之三

御力

•

260×74×7 011

(15)

卷之三

Three empty square boxes for writing, arranged vertically.

三三三

127×76×9 065

(27)  $\times$  (28)  $\times$  0.5 081

## 6111-1-8(7mm×8)

(16) 「□

於子五□□伝申  
〔以カ〕  
〔□北出〕

105×40×1 011

6111-1-5(7mm×8)

「大外云家堅右輕カ」  
〔V□□□□□□□□□〕〔重カ〕  
〔云カ〕

195×(30)×3 081

(18) 「稻是

一八月六日□間ニテ為是

□任同給□□□□□前

211×36×2 011

(19) 「□□  
〔紹カ〕  
紹□始」

・「□□」

(20) 不内座

121×47×2 081

(72)×(42)×7 081

(21) 「免私即節  
〔免私即節  
カ〕  
〔□□□□□〕

(241)×45×6 081

## 6111-1-7(西側屋敷境水路)

(22) □□

6111-1-7(7mm×8)

(23) 「唐織

(147)×60×9 065

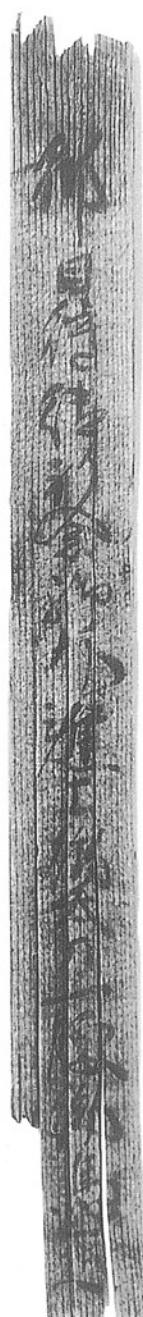
(24) □□

237×79×7 011

(1)は福井藩士の役職と氏名と考える。(2)は上方と左側が欠損しており、文字も左側が欠け判読できない。二文字目のつくりは右である。(3)(9)は長方形の下方を尖らせたものであるが、文字は判読できない。(5)(6)ともに表面に漢詩と思われるもの、裏面に植物の絵が描かれる」とから、同じ性格のものであろう。(6)は長方形で、右下を四角に切り欠く。原形は不明だが部材の一部か。(10)は長方形を呈し、上部と下部左右に穴を穿つ。(11)は上下が破損しているが、本来は円盤状を呈し樽などの蓋か底であろう。(12)は長方形を呈し、中央左右に穴を穿つ。裏面は文字が重なっており、習書に使われたものかもしれない。(13)は下方を欠損するが、上部左右に切れ込みの入るものである。人名と考える。(14)は長方形の板で、両面に方形の切り込みを持つ。(15)は一片に割れさらに上下を欠損する、薄い板である。(16)の表面一行目四文字目は手偏の文字である。(17)は上部左側を

(78)×(27)×3 081

2001年出土の木簡



(23)



(1)



(5)



(12)



(6)

欠損するが、右に切り込みが入る。(19)の表面二行目二文字目は女偏の文字である。上部右と下部が破損し、左右の二片に割れている。

(23)は下部が破損している。左右に比し中央部が盛り上がり「へ」の字状を呈し、下部中央部に方形の穴があけられている。

木簡の釈説については、福井市郷土歴史博物館の足立尚計氏のご協力をいただいた。

(長谷川健二)

## 石川・畠田・寺中遺跡

1 所在地 石川県金沢市畠田西二丁目ほか

2 調査期間 二〇〇一年度調査 二〇〇一年(平13)五月一

二月

3 発掘機関 (財)石川県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 浜崎悟司・岡本恭一・立原秀明・菅野美香子

5 遺跡の種類 集落跡(官衙関連遺跡?)

6 遺跡の年代 弥生時代～中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(金沢)

本遺跡は日本海を臨む犀川・大野川河口部の扇状地上に立地する、弥生時代から中世までの複合遺跡である。畠田・寺中遺跡は畠田遺跡・畠田大徳川遺跡の二遺跡と隣接し、調査では三遺跡を便宜上一体の遺跡として扱っている。今年度は三年目にあたる調査となる。

これまでの調査では、奈